

佐賀市文化財調査報告書第23集

佐賀工場団地内遺跡

平成元年3月

佐賀市教育委員会

佐賀市文化財調査報告書第23集

佐賀工場団地内遺跡

平成元年 3 月

佐賀市教育委員会

発刊にあたって

本書は、一般国道263号バイパス建設に伴い発掘調査を実施した、佐賀工場団地内遺跡の調査報告書です。

今回の発掘調査では、弥生時代から中世の所産である土壌、溝、井戸を多数検出しました。出土遺物には弥生土器（甕・壺・鉢・器台）、土師器（坏、壺、高坏）、須恵器（坏、壺）、瓦器（埴）、磁器（碗）、石器（石包丁）、木製品（曲物）等があります。

これらの出土遺物の中で特筆すべきものとして、井戸出土の磁器碗があります。これは鎌倉時代から室町時代にかけて、南宋や高麗から輸入されたものです。輸入磁器の出土は当時の大陸貿易を研究する上で重要な発見といえます。

本書が佐賀市の歴史を研究する上で一資料となりましたら幸甚に存じます。

なお、この調査にあたり、関係機関並びに地元の方々の御理解・御協力に対し、厚く御礼申し上げます。

平成元年 3 月31日

佐賀市教育委員会

教育長 山 田 清 人

例 言

1. 本書は、一般国道263号バイパス建設に伴い、発掘調査を実施した佐賀工場団地内遺跡の報告書である。
2. 発掘調査は佐賀県と佐賀市が埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結し、佐賀市教育委員会が実施した。
3. 遺構の実測は、新九州測量設計株式会社に委託した。
4. 報告書作成に係る業務分担は次のとおり。
遺物復元 西首金子
遺物実測・製図 岩井祥子
遺構・遺物写真撮影 木島慎治、福田義彦
報告書執筆 福田義彦

凡 例

1. 遺構はSK：土壌、SE：井戸、SD：溝の分類記号で示す。
2. 遺構の寸法数字はm単位、遺物の寸法数字はcm単位とした。
3. 方位はすべて座標北である。
4. 遺構番号は、種別毎に通し番号を付した。
5. 遺跡略号はSKDとした。

本文目次

I 序 説	1
1. 調査に至る経過	1
2. 調査の組織	1
II 位置と環境	1
1. 地理的環境	1
2. 歴史的環境	1
III 調査の概要	2
1. A地区	3
(1) 土壌	3
S K 001土壌	3
S K 004土壌	3
S K 005土壌	4
S K 007土壌	4
(2) 溝	5
(3) A地区出土遺物	5
2. B地区	11
(1) 土壌	11
S K 009土壌	11
S K 010土壌	11
S K 013土壌	12
S K 014土壌	12
S K 015土壌	13
S K 025土壌	13
S K 026土壌	13
S K 027土壌	14
S K 032土壌	14
その他の土壌	16
(2) 井戸	16
S E 001井戸	16
S E 002井戸	16
S E 003井戸	17
S E 005井戸	17

(3) 溝	17
(4) B地区出土遺物	18
3. まとめ	24

図版目次

図版 1	S K 001土壌 S K 001, 002土壌 S K 005土壌 S K 008土壌 S K 006土壌 S D 001溝 S D 006溝 A地区全景
図版 2	S K 009土壌 S K 010土壌 S K 014土壌 S K 015土壌 S K 026・027土壌 S K 026土壌 S K 027土壌 S X 001土器溜り
図版 3	石包丁出土状況 S K 032土壌 S K 032出土土師器 P-1 井戸群検出状況 S E 001井戸 S E 002井戸
図版 4	B地区中央東壁部 B地区北東部 B地区北半部 B地区全景
図版 5～10	佐賀工場団地内遺跡出土遺物

I 序 説

1. 調査に至る経過

一般国道263号バイパス改良事業に伴い、佐賀土木事務所から埋蔵文化財発掘通知の提出があったので、同事務所、佐賀市教育委員会で協議を行い、昭和62年10月28日・29日の2日間で埋蔵文化財確認調査を実施した。その結果、道路予定地8,100㎡のうち1,500㎡に遺跡が確認された。昭和63年度事業として本調査を実施し記録保存とすることとした。

調査は、表土はぎを調査員の立合いのもとに昭和63年3月7日から同11日まで、佐賀土木事務所の直接事業とし、人力による調査は昭和63年4月4日から同年6月30日まで実施した。

調査地は水路により南北に分断されていたので、南をA地区、北をB地区として調査を行った。

2. 調査の組織

調査主体 佐賀市教育委員会

事務局 佐賀市教育委員会 社会教育課

参事兼課長 山口喜代治

課長補佐 中野和彦
兼文化係長

事務吏員 甲木亮一（庶務担当）

木島慎治（調査担当）

福田義彦（調査担当）

発掘作業員 杉町スミ子、高蔵公子、内村美里、富永ツヤ子、角田千代乃、原ミチエ、生田美代子、広瀬八重子、後藤美智江、広瀬幸子、村川キクエ、橋本絹子、松林公子、松林初代、諸藤アサエ、櫛山栄子、前田洋子

調査協力 佐賀土木事務所、(有)江下建設、(株)新九州測量設計

II 位置と環境

1. 地理的環境

佐賀工場団地内遺跡は佐賀市高木瀬町大字長瀬字坪の上一本杉に所在する。佐賀市域の西部に位置し標高は約7mを測る。当地は現在海から最短距離にして約10kmに位置する。弥生時代の居住南限は標高4mの線と推定されており、当時はごく海に近い地点であったものと思われる。

周辺は元来水田地帯であったが、市街化区域となつてからは宅地化が著しい。

2. 歴史的環境

高木瀬町は東部と西部では遺跡の密集度合が対照的でほとんど西部にかたよっている。



Fig.1 佐賀工場団地内遺跡周辺遺跡分布図(1/50,000)

当地区は佐賀工場団地内遺跡として周知されている地域からやや北に同遺跡の範囲が延びるものと認められたのでこの遺跡名を使用した。

周辺の遺跡は弥生時代のものに平尾三本杉遺跡、長瀬一本杉遺跡、長瀬遺跡、平安時代のものに東高木遺跡、鎌倉・室町時代のものに高木城跡、坪ノ上城跡が周知されている。実際に発掘調査を行ったのは高木城跡の一部のみである。また、調査時の出土ではないが、同町大字高木字四本杉で弥生時代の広形銅鉾が土取の際出土している。

この高木瀬地区が文書等の記録として数多く登場するようになるのは平安末期から中世になってからのことである。

佐賀郡大和町春日に太政大臣藤原良房から数えて五代目の藤原文時が甘南備城を築き、その一門から高木、於保、益田、龍造寺等の諸氏を出した。このうち高木氏は久安元年(1145)、高木越前守貞永の時、同町に築城し、龍造寺隆信の軍門に下るまでこの高木城を本拠とした。

III 調査の概要

調査対象地区はバイパス建設予定地の1,500㎡であり、水路をはさんで南をA地区、北をB地区として調査を実施した。(Fig.2) A地区では弥生時代後期、古墳時代、奈良時代の遺構を検出した。出土遺構は土壌、溝、土器溜りがある。この地区は湧水が多く、遺構検出後、個別の

写真は直後に撮影するように努めたが、地山が砂地であるため、一度水没すると掘込みが不明確となり撮影ができなかったものもある。B地区は弥生時代中期から古墳時代、中世の遺構を検出した。出土遺構は土壌、溝、井戸、ピット、土器溜りがある。

出土遺物は両地区から主として弥生時代の甕・壺・高坏・鉢・石包丁、古墳時代の土師器壺・甕・坏・須恵器坏、鎌倉時代の土師器皿・瓦器碗・磁器碗・鉄器・石製品・木製品等を検出した。

これらの遺物・遺構の特徴的なものを抽出し後述する。

1. A地区

(1) 土壌 当地区で8か所に検出した。規模形状はまちまちで、東半部に点在する。掘込みの浅い土壌は水没後消失したのものもある。

SK001土壌(Fig. 3)

調査区東端にあって、掘込面の標高は5.4mを測る。

上面の平面形は隅丸長方形を呈するものと考えられ、検出長軸2m、短軸1.5m、中心部で深さ0.56mを測る。床面は比較的平坦で壁は角度をもって立ち上る。SK002土壌を切っている。

埋土は淡黒色の灰まじり状のもので、下層になるにしたがい淡黒褐色となる。遺物は埋土全域から須恵器・坏(身・蓋)、土師器細片を検出した。

SK004土壌 (Fig. 4)

調査区南部中央にあって、周辺の標高は5.3mを測る。上面の平面形は隅丸長方形を基調としたものであるが、南西隅にピット状のふくらみがある。長軸8.4m、短軸0.55m、中心



Fig. 2 佐賀工場団地内遺跡周辺見取図

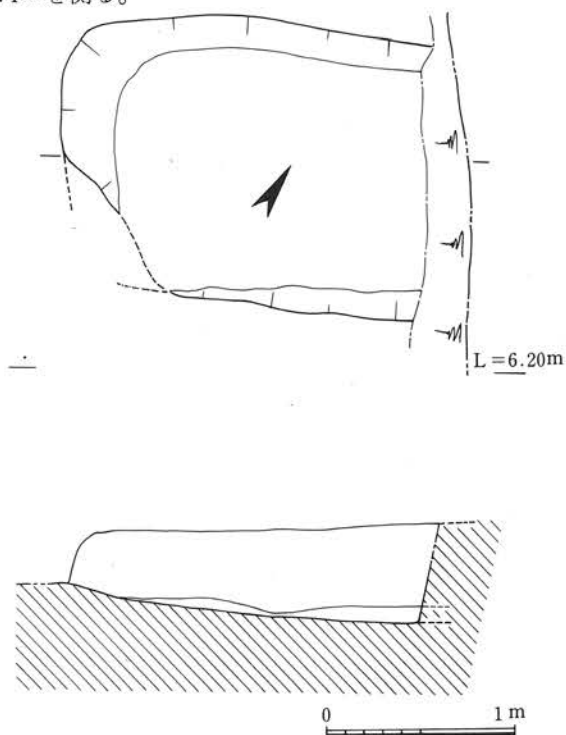


Fig. 3 SK001土壌実測図 (1/40)

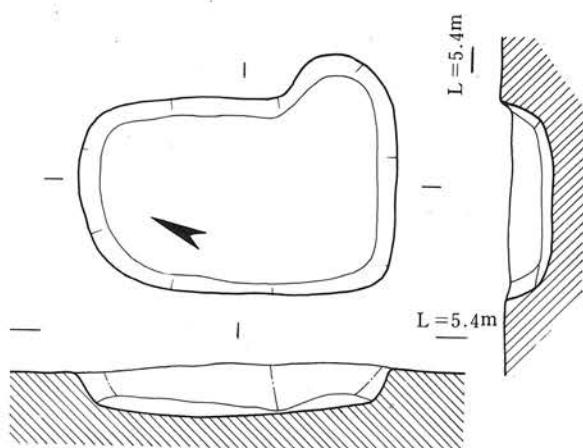


Fig. 4 SK004 土坑実測図 (1/20)

部で深さ0.15mを測る。床面はわずかに中央部が深くなっており、壁は比較的ゆるやかに立ち上がる。

埋土は淡褐色を呈し、主な出土遺物には、弥生土器の甕・高坏片などがある。

SK005土坑 (Fig. 5)

調査区中央にあつて、周辺の標高は5.25mから5.35mを測る。上面の平面形は孤状を呈し全長5.5m、最大幅1.25m、深さ0.15から0.3mを測る。床面はゆるやかな起伏があり、壁もなだらかに立ち上がる。

埋土は淡黒色で主な出土遺物には土師器 (甕・壺・坏) などがある。

SK007土坑 (Fig. 6)

調査区南端にあり、周辺の標高は

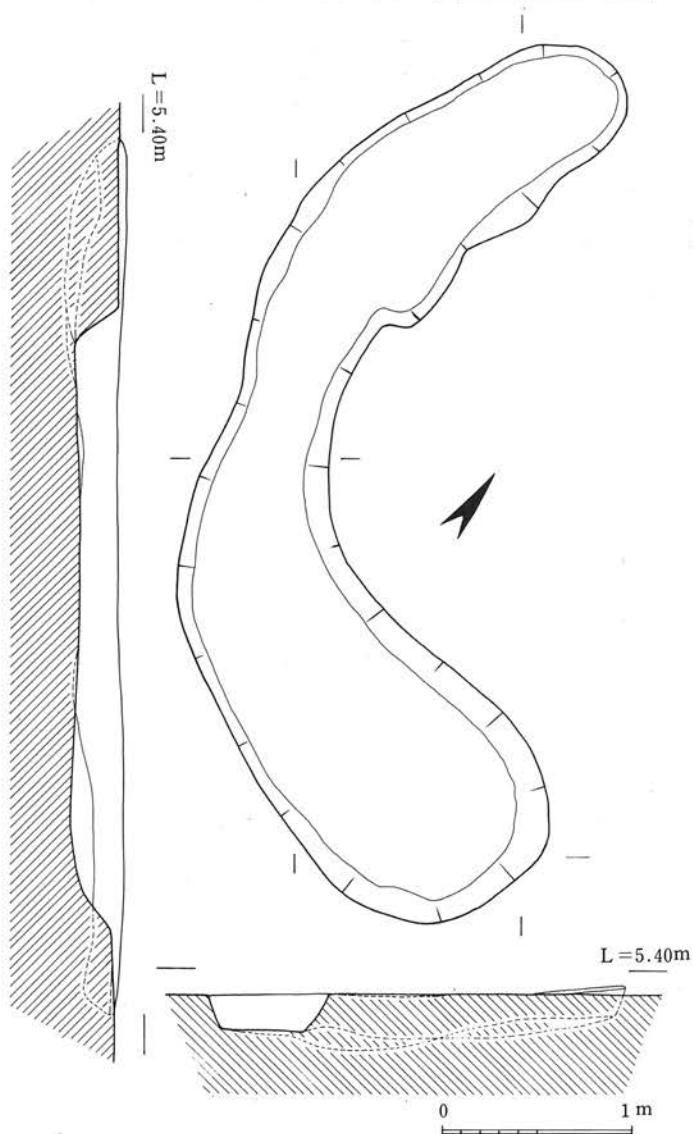


Fig. 5 SK005 土坑実測図 (1/40)

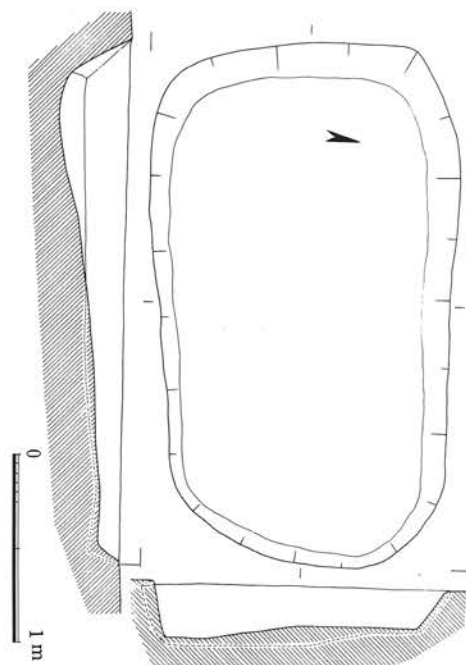


Fig. 6 SK007 土坑実測図 (S = 1/40)

5.38mから5.40mを測る。SD001と隣接しているが切合い関係は認められない。上面の平面形は隅丸長方形を基調としているが、東部が丸味を帯びている。長軸2.78m、短軸1.54m、深さは中心部で0.19mを測る。床面はゆるやかな起伏があり、西壁際が最も深く0.38mを測る。壁は西壁がゆるやかに立ち上がり、他壁はやや角度をもつ。

埋土は2層に大別でき上層が淡黒褐、下層が淡黒褐色である。遺物は埋土上層から須恵器(坏)、土師器片を検出した。

(2) 溝

A地区で6条の溝を検出した。南北方向のものと東西方向のものに大別でき幅0.5mから1.7m、深さ0.15mから0.6mを測る。すべての溝が全体の一部分であり、全長やその性格は不明。時期は弥生後期から奈良・平安期の所産と考える。SD002・3・4・6溝で遺物を検出した。

(3) A地区出土遺物

弥生時代から奈良時代の遺物を検出した。特徴的なものを図化し、その概要を後述する。1、2は須恵器坏(蓋)、口径9.1cmから16.6cm、残存器高2.8cmから2.9cm。外面上部に回転ヘラケズリを有し、色調は暗灰色を呈する。3・5・7・9は高台付の須恵器坏、口径9.95cmから13.9cm、器高3.85cmから4.85cm、底径6.95cmから8.6cm。9の高台部の貼付が雑で、接合面が観察できる。調整は主として回転ヨコナデ、ナデによる。底部はヘラ切痕を有する。10は弥生土器の高坏受部。復元口径27.9cm、残存器高5.75cm。体部は直線的にのび、口縁部で外反する。調整は内面ヘラミガキとハケ目、外面ヨコナデとナデが施されている。11は弥生土器の甕。復元口径26.4cm、残存器高11.65cm。体部は内湾気味に立ち上がり、口唇部内面はわずかに鋤状口縁状となり、上面は平坦。内外面共に口縁部はヨコナデ、体部は縦方向のハケ目調整がなされている。12は須恵器壺。復元口径12.6cm、残存器高5.6cm。肩部が強く張る器形と考える。口縁部は強く外反し、端部は丸みを帯びる。内面肩部下には同心円状のタタキ痕が残る。13・18・19は土師器甕型土器。復元口径20から27cm、残存器高6.9から7.5cm。口縁部内外共ヨコナデ、胴部ハケ目とナデが施されている。19は最大径を口縁部にもち、体部は外面気味に立ち上がる。14から16は須恵器坏(蓋)。疑宝珠を有し、15・16は口縁部に消滅しつつある反りをもつ。14で口径14.8cm、器高2.75cm、15で口径13.85cm、器高3.25cm。16で口径13.85cm、器高3.35cm。17は須恵坏。復元口径13.7cm、高台復元径9.4cm、器高5.55cm。体部はわずかに内湾気味に立ち上がり、口縁部は外反する。色調は内面灰褐色、外面淡茶褐色を基調とする。8は土製支脚、高さ18.55cm、中央部幅7.7cm、8cm。色調は不統一であり、灰褐色・褐色・暗褐色を呈する。

20は須恵器坏。復元口径9.5cm、器高4.4cm。底部は丸底。体部から口縁部にかけて直立的に立ち上がる。口縁部内外面共にヨコナデ、底部外面に不定方向のヘラケズリを有する。21・22は須恵器坏(蓋)。口径14.6cm・13.75cm、器高3.55cm・3.45cmを測る。疑宝珠を有し体部は内湾気味に口縁部に至る。口縁部は端部を折りまげている。23は須恵器坏(蓋)口径9.85cm、器高3.4cm。天井部外反は平坦でヘラ切の痕跡を有し、比較的角度をもち口縁部に至る。口縁端部は返

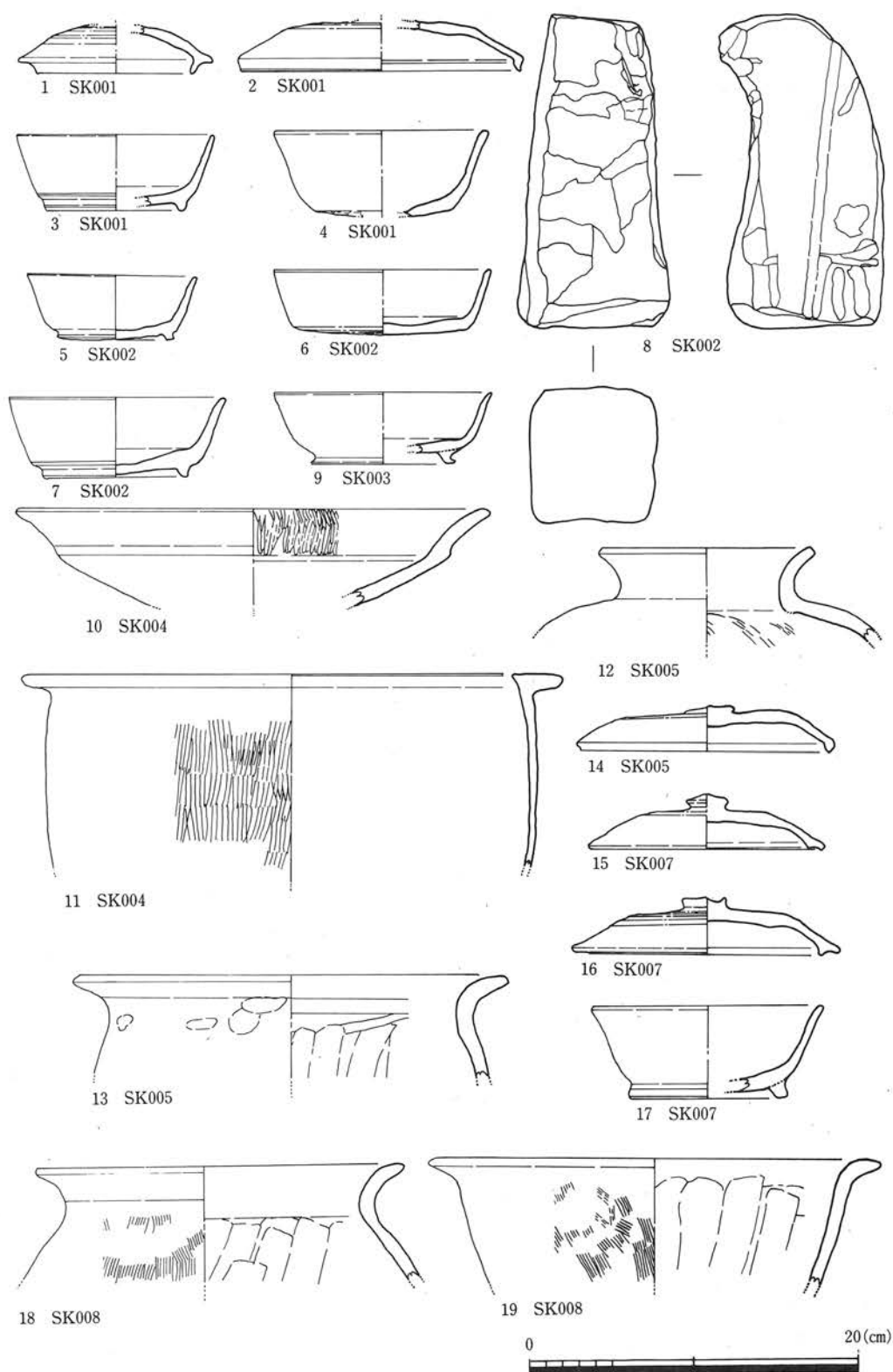


Fig. 7 A地区出土遺物実測図(1) (S = 1/4)

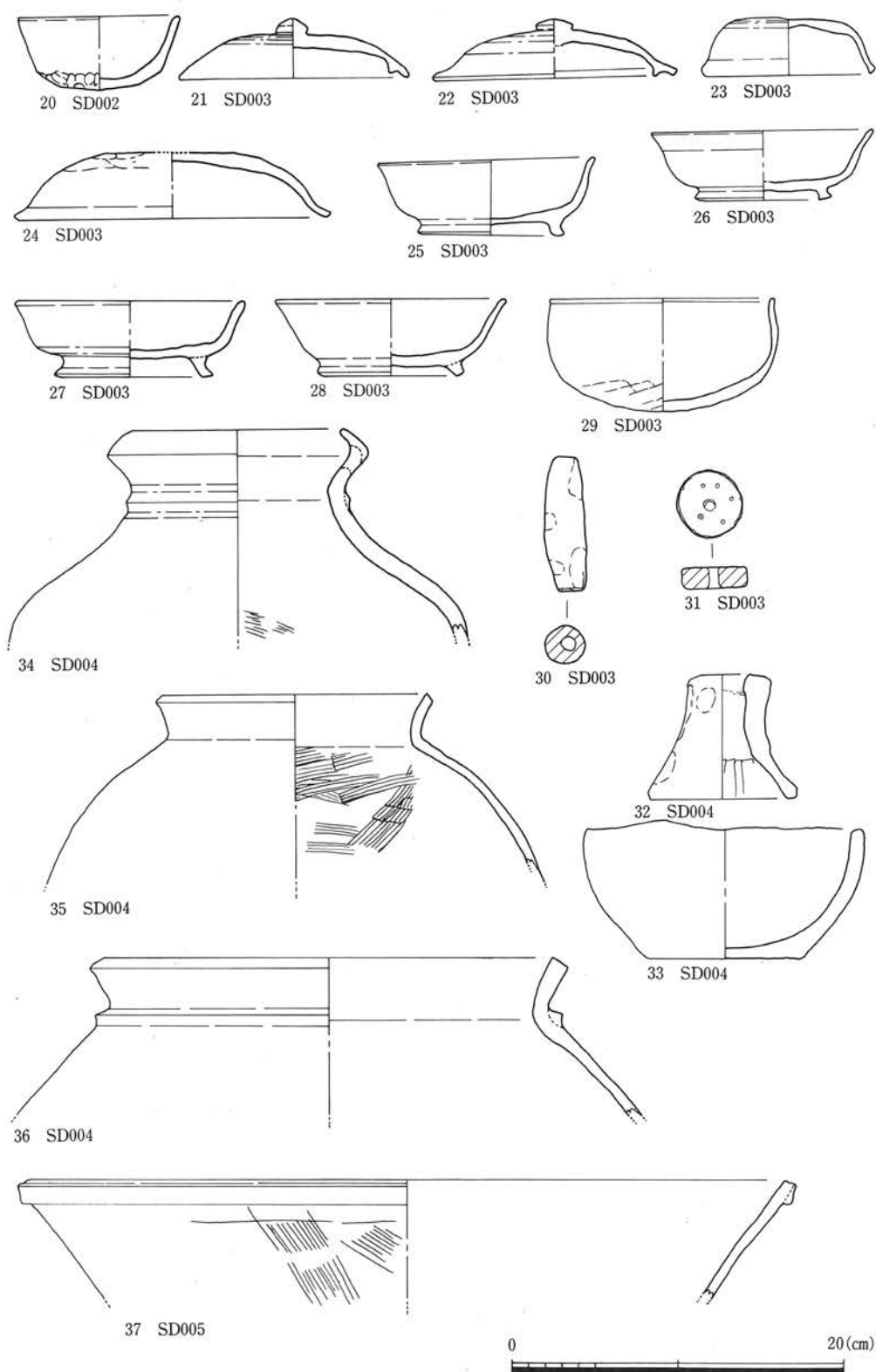


Fig. 8 A地区出土土器実測図(2) (S = 1/4)

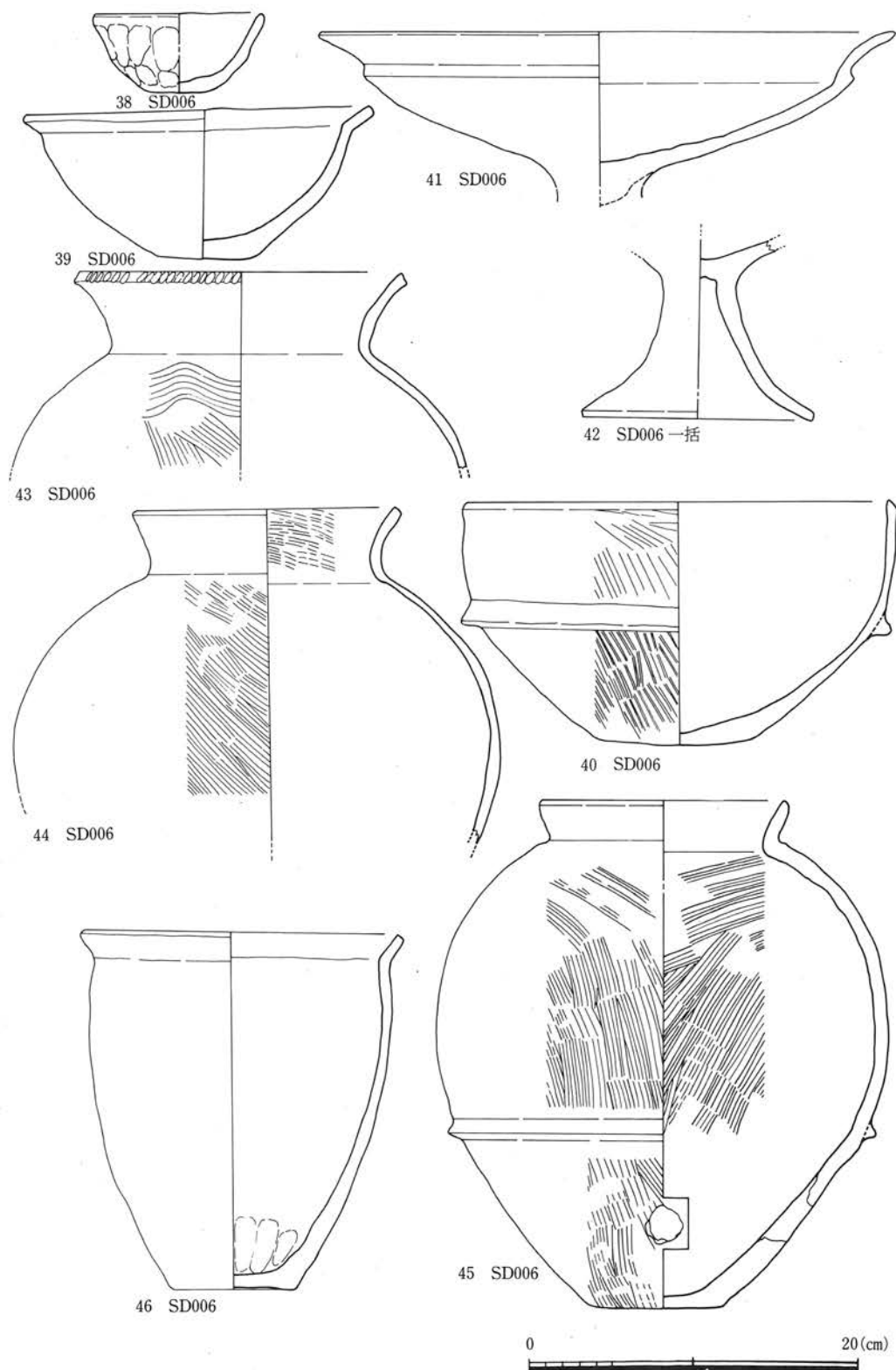


Fig. 9 A地区出土遺物実測図(3) (S = 1 / 4)

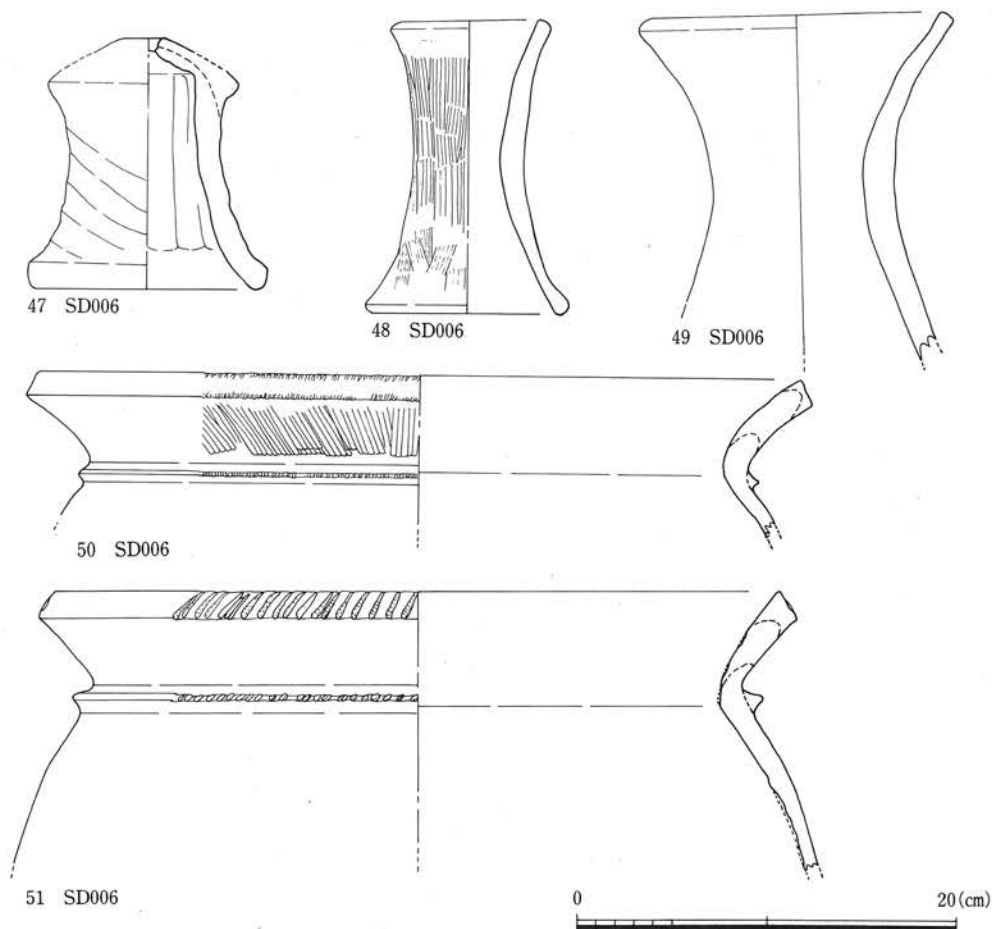


Fig. 10 A地区出土遺物実測図(4) (S = 1 / 4)

りがなく、つまみ上げにより先鋭化している。24は土師器坏(蓋)。口径18.4cm、残存器高3.95cm。口縁部はゆるやかに外反する。底部外面にヘラケズリを有する。25から28は高台付須恵器坏。口径13.0cmから13.7cm、器高4.1cmから4.75cm、高台径7.7cmから9.45cm。平坦な底部から内湾気味に立ち上がり、口縁部になってわずかに外反する。29は須恵器坏。底部は丸底で内湾気味に立ち上がり、口唇部がわずかに外反する。口縁部内外面共にヨコナデ、外面底部にヘラケズリを有する。30は土錘。長さ7.95cm、最大幅2.35cm。完形品。31は石製の紡錘車。径4.0cm、厚さ1.3cm、孔径0.55cmから0.7cm。片面に径0.2cm程度の穿孔を5か所に有するが、貫通していない。32は器台。受部径4.85cm、裾部径8.85cm、器高7.45cm。ほぼ完形品。33は鉢。復元口径15.3cm、器高8.3cm、復元底径9.3cm。体部は内湾気味に立ち上がり、器壁は厚い。35は甕形土器。復元口径15.8cm、残存器高11.15cm。36は甕。復元口径26.7cm、残存器高9.35cm。口縁部はくの字状に外反し、端部は断面三角形を呈する。頸部に三角形の凸帯があり一巡する。調整は内外面共にヨコナデとナデによる。37は土師質の鉢形土器。復元口径45cm、残存器高7cm。体部から

口縁部にむけて直線的に立ち上がり、口唇部外面に薄い玉縁をもつ。内面横方向のハケ目、外面縦方向のハケ目のあとナデを施している。色調は茶褐色を基調とするもので、外面に一部ススが付着している。38は埴型土器。復元口径9.9cm、器高4.7cm。底部はわずかに平底状を呈するが体部との境が明確でない。器壁は厚く、口縁部は内湾気味に立ち上がる。調整は内外面共にナデによっている。39は鉢。口径20.2cm、器高9.3cm、底径5.7cm。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部で外反する。口縁内部には稜を有する。調整は上半部がヨコナデ、下半部が不定方向へのナデによる。40は鉢形土器。口径25.2cm、器高14.5cm、底径9.4cm。底部は丸味をもつ平底。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は直立する。体部中央に断面三角形の凸帯を有し一巡する。調整は内外面共に力強いハケ目（櫛状工具によるものか）とナデによる。41・42は高坏、別個体である。41は受部径34.4cm、受部の体部はわずかに内湾気味にのび、口縁部で外反する。42は復元脚径13.7cm。調整は双方ともナデとヨコナデ。43は壺型土器。復元口径19.2cm、残存器高11.2cm。体部は丸味をもち、口縁部は頸部から外反する。口唇部は断面三角形を呈し、外面に刺突文を有する。これはある程度の間隔をあけ一巡する。調整は主としてハケ目とナデによるが、外面頸部下のハケ目は波状を呈する。44は最大径を胴部に有する壺型土器。口径15.25cm、残存器高20.15cm。口縁部はゆるやかに外反する。口縁内面から器外面にかけてハケ目、胴部内面はナデによる調整。45は壺型土器。復元口径14.5cm、器高30.25cm、復元底径8.0cm。丸味をもつ底部から体部は内湾して立ち上がり、頸部から直立気味に外反する。外面胴部下に断面三角形の凸帯を有する。底部付近に径2cm程度の穿孔を有する。焼成後に外部から行ったものである。46は甕型土器。口径18.7cm、器高21.5cm、底径7.4cm。底部はやや上底気味で体部は直立気味に立ち上がり、口縁でもわずかに内湾する。調整は主としてハケ目とナデによる。内面底部には強い指頭によるナデがある。色調は赤褐色を主体とし、外面の一部に黒色部分がある。

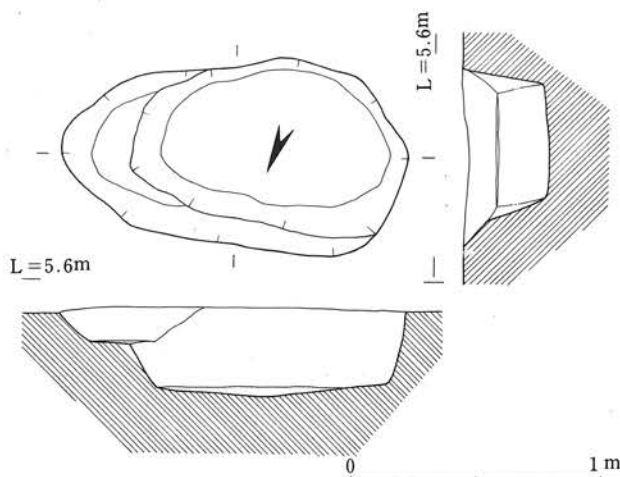


Fig. 11 SK009 土壤実測図 (S=1/30)

47は器台。底径11.6cm、器高13.1cm。脚部は内傾しながら立ち上がり、逆「く」の字状に反転し、受部を形成する。頂部には径2cm程度の孔を有する。体部外面に指頭により絞り上げた痕跡を有する。48・49は器台。受部径8.35cm、脚部10.6から14.9cm。調整は主に外面が縦方向のハケ目、ヨコナデ、内面がヘラ状工具によるナデ、ハケ目、ヨコナデによる。50は甕。復元口径52.7cm、残存器高10.85cm。

口縁部は「く」の字状を呈し、体部に比して器壁が厚い。頸部に断面三角形の凸帯を有する。凸帯部には刺突文を有する。調整は外面はハケ目とヨコナデ、内面がヨコナデ、ナデによる。51は甕。復元口径50cm、残存器高19.2cm。基本的には50と同様なタイプ。口唇部外面には櫛状工具による刺突文を有する。

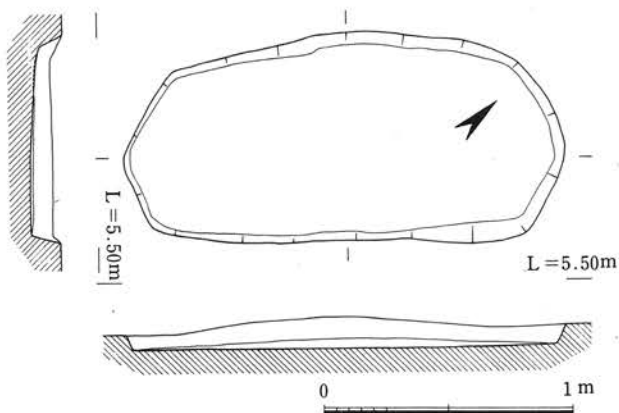


Fig. 12 SK010 土坑実測図 (S = 1/30)

2. B地区

(1) 土坑

調査区北半部を中心に33基検出した。弥生時代のものがほとんどで、他は古墳時代、中世のものを数基検出した。この中で特徴的なものを抽出し後述する。

S K009土坑 (Fig. 11)

調査区北端中央にあり、西にS K013、東にS K037と近接する。掘込み面の標高は5.5m。上面の平面形は東西に長い楕円を基調とする。長軸13.9m、短軸0.71m、深さ0.36mを測る。床面は中央部がわずかに低くなっており、壁は角度をもって立ち上がる。遺構東端がテラス状を呈する。別遺構の可能性もあるが不明確であった。

埋土は淡黒褐色を呈し、弥生土器片を少量検出した。

S K010土坑 (Fig. 12)

調査区中央にあり、S E001とS E002の間に位置する。掘込み面の標高は5.32m。上面の平面形は楕円形を基調とするが、東西掘込みがやや突出している。長軸1.77m、短軸0.83m、中心部で深さ0.1mを測る。床面は平坦で

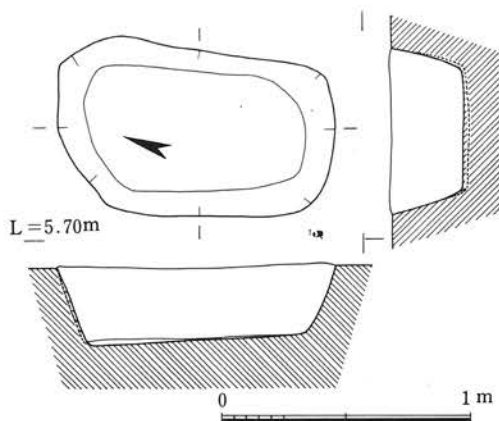


Fig. 13 SK013 土坑実測図 (S = 1/30)

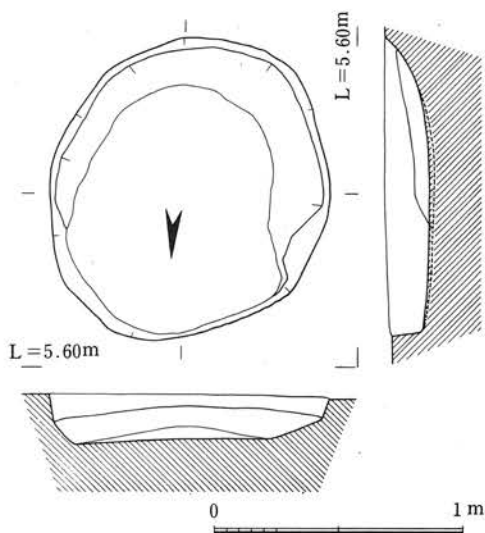


Fig. 14 SK014 土坑実測図 (S = 1/30)

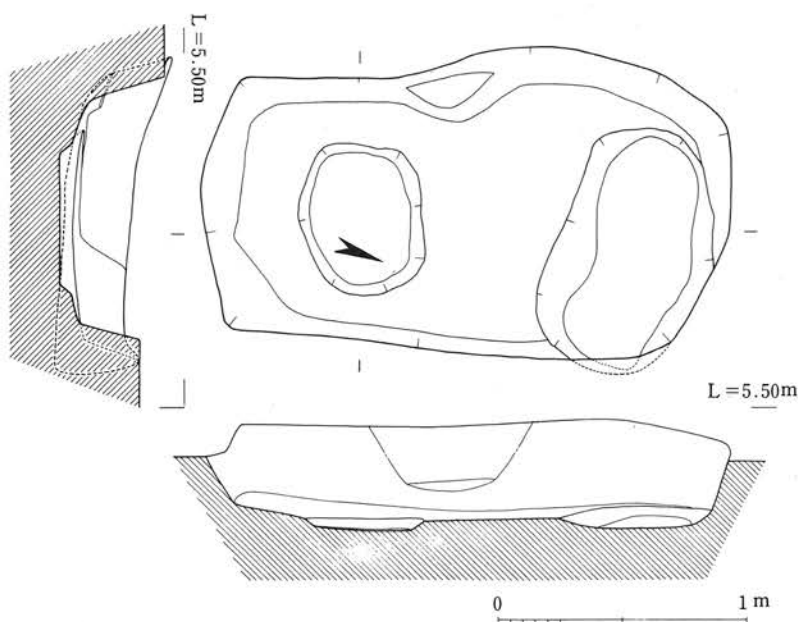


Fig. 15 SK015 土坑実測図 (S = 1/30)

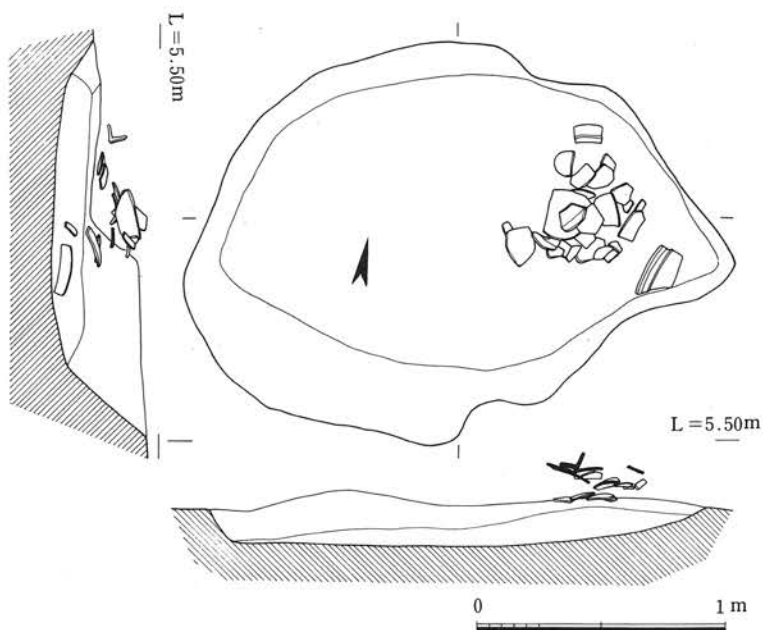


Fig. 16 SK025 土坑実測図 (S = 1/30)

S K014土坑 (Fig. 14)

調査区中央東寄りにあつて、S K015から0.5mの距離にある1に切られている。掘込み面の標高は5.5m。上面の平面形は東西に長い楕円形を呈する。長径1.2m、短径1.12m、深さ0.18

四方の壁は比較的角度をもって立ち上がる。元来、深かったものが上部を削平されている。

埋土は淡黒褐色で、その全域から弥生時代土器片を数点検出した。

S K013土坑

(Fig. 13)

調査区北部中央にあつて S K041 と切れあっている。掘込み面の標高は5.5m。南北に細長い隅丸長方形を基調とするが、北辺掘込みが若干乱れている。長軸1.11m、短軸0.67m、深さ0.3mを測る。床面は平坦で壁は比較的角度をもって立ち上がる。

埋土は淡黒褐色で弥生土器細片を少量検出した。それらに混じって石包丁(破片)を1点検出した。

mを測る。床面は東壁下部が最も深く0.2mを測る。南北床断面は舟底状を呈し、南壁はなだらかに立ち上がり、北壁はほぼ直立する。

埋土は淡黒褐色を呈し、弥生土器細片を微量検出した。

SK015土壙

(Fig. 14)

調査区中央にあって、北側0.4mにはSK010がある。掘込み面の標高は5.4m。上面の平面形は南北に長い隅丸長方形を基調としたものである。長軸2.1m、短軸1.22m、深さ0.39mを測る。床面には長軸0.6

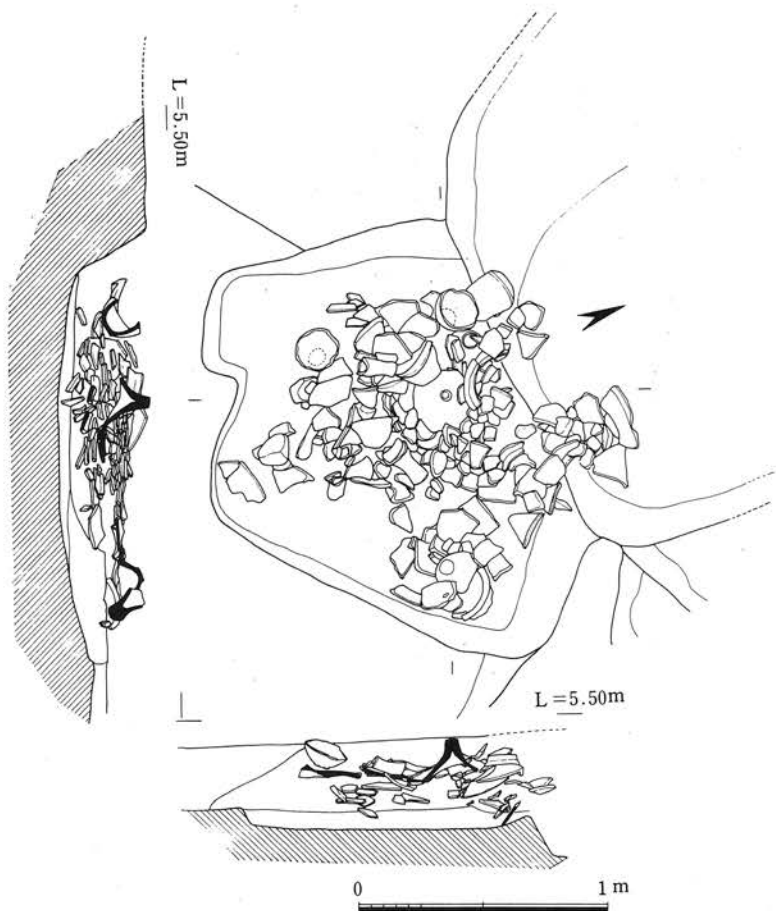


Fig. 17 SK026 土壙実測図 (S = 1/30)

mと1mの楕円を呈する。深さ0.5mから1.0mの掘込みが2か所にある。この遺構掘込み上面では確認できなかったので、同一遺構又は先行する遺構と考える。

埋土は淡黒褐色を呈し、弥生土器細片を検出した。

SK025土壙 (Fig. 16)

調査区の北部中央にあって、SK4・21・26・27等が混在する中にある。掘込み面の標高は5.4m。上面の平面形は元来、東西に長い楕円形を基調とするものであったが、SK021と切れあい、その形状が不定形となっている。長径2.21m、短径1.6m、深さ0.35mを測る。床面は中央部がわずかに深くなり、断面は舟底状を呈する。壁は比較的なだらかに立ち上がり、西南部が最も元来の姿を残している。

埋土は淡茶褐色を呈し、東壁寄りに弥生土器を集中して検出した。甕・鉢等の破片であるが、いずれも浮いており、床直のものはない。

SK026土壙 (Fig. 17)

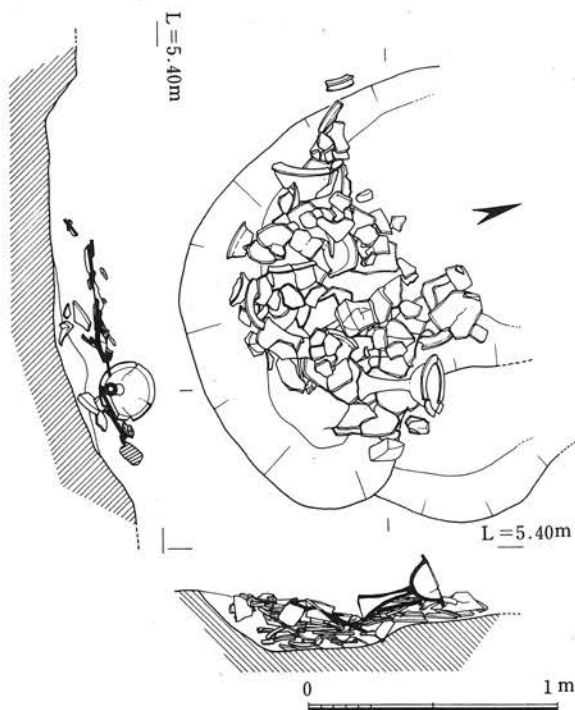


Fig. 18 SK027 土坑実測図 (S = 1/30)

調査区中央北端にあり、SK004と切れ合っている。遺物の出土状況からみて、この遺構がSK004に後出したものと判断する。掘込上面の標高は5.4m。上面の平面形は不定形であるが、元来方形に近かったのではなかろうか。検出長軸1.8m、短軸1.75m、深さ0.38mを測る。床面はほぼ平坦であり、残存状況が最も良好な西壁は直線的に立ち上がる。掘込み南西部が0.2m程度南に突出する。

埋土は淡茶褐色を呈し、全域から弥生土器を検出したが、床直のものはない。出土した器種には高坏・鉢・甕・蓋等がある。

SK027土坑 (Fig. 18)

調査区の北端中央にあつてSK026からは東に0.5mの距離にある。

上面の平面形は北部が不明のため形容しにくい、概ね不定形の様相が検出した部分から推定できる。長軸1.62m、検出短軸1.35m、深さ0.2mを測る。床面は土器の集中している南壁寄り最も深く北部になるにつれて浅くなる。残存状況の最も良好な南壁は、平坦な床面からゆるやかに立ち上がる。

埋土は淡茶褐色を呈し、全域から弥生土器を多数検出した。検出土器には高坏・甕・鉢などを検出したが、量的には甕が最も多い。この出土土遺は掘込み面から床面まで折り重なるような状況で検出した。

SK032土坑 (Fig. 19)

調査区の北西部にあり、この遺跡で検出した土坑の中で最大規模のものである。また、古墳時代の土坑として唯一のものである。検出面の標高は5.45m。上面の平面形は南北に長い対角線を結ぶことのできる、平行四辺形状を呈する。床面はゆるやかな起伏があり、壁は北部以外は角度をもって立ち上がる。

埋土は弥生時代のものより若干濃い淡黒褐色である。土器片は埋土中からほとんど検出せず、図中にある完形もしくはそれに近いものを検出した。器種には二重口縁壺形土器・壺・台付坏などがある。一括資料と考える。

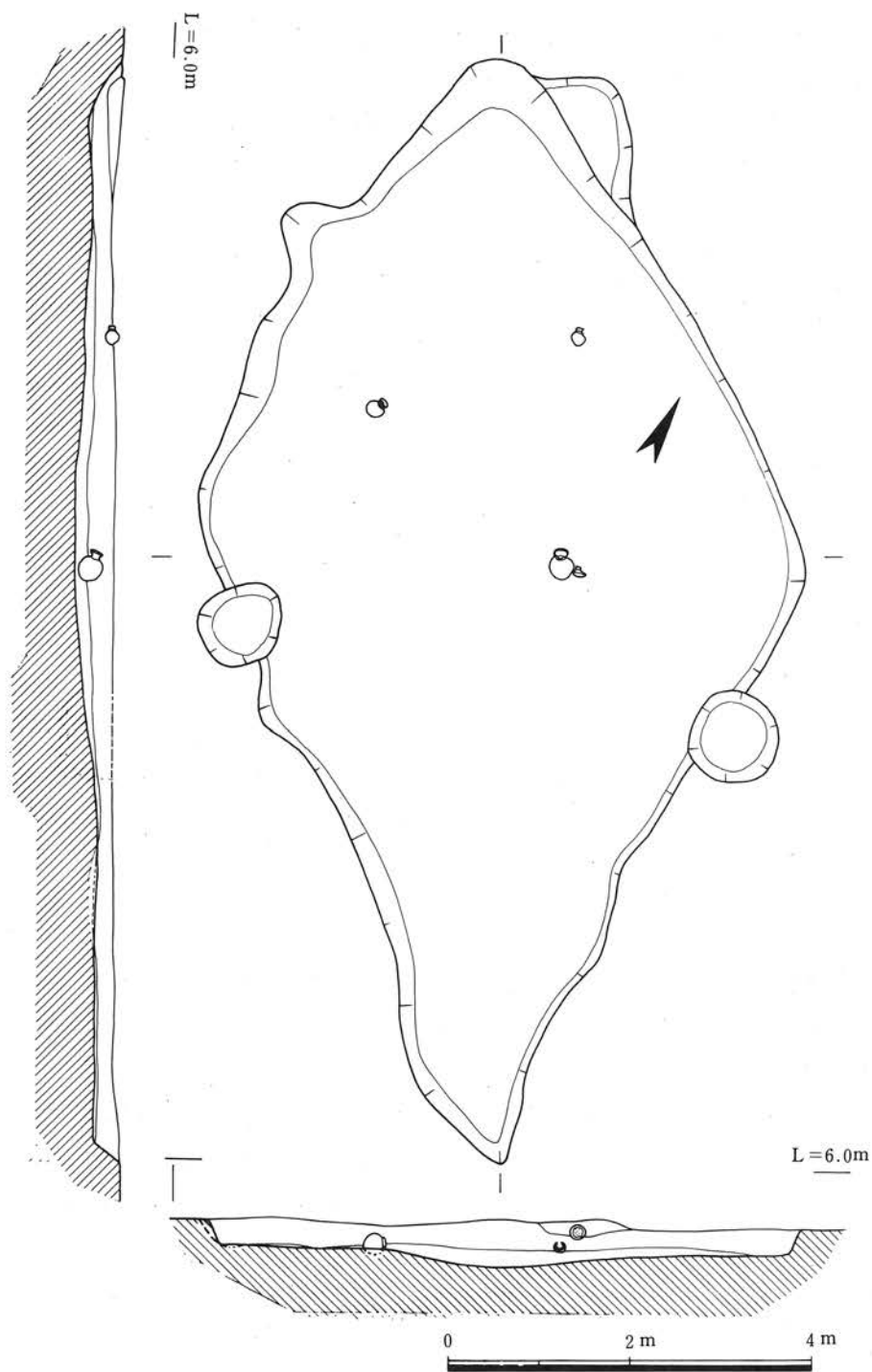


Fig. 19 SK032 土壇実測図 (S = 1/80)

その他の土壌

調査区北東隅に土器溜りを検出した。掘込み、規模等が不明確で図化できない。弥生時代中期の所産と思われる土器を多数検出した。表土はぎの際、表土下層として取りあげたものの中にもここからの出土が多数あると考える。主な出土土器として甕・鉢・器台・石包丁などがある。

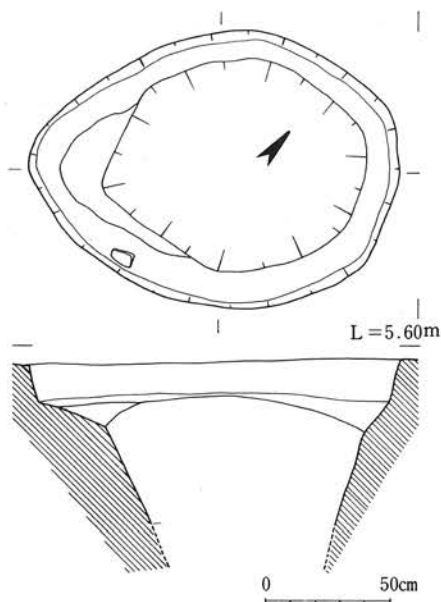


Fig. 20 SE001 井戸実測図 (S = 1/60)

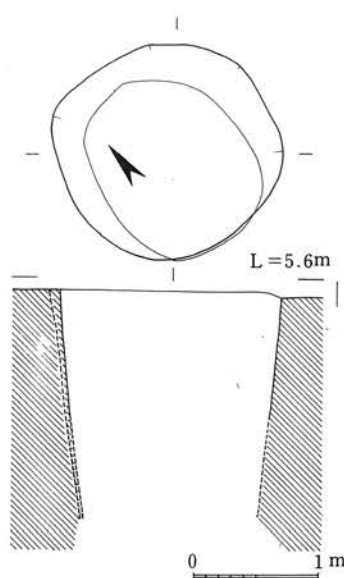


Fig. 21 SE002 井戸実測図
(S = 1/60)

(2) 井戸

調査区 (B 地区のみ) で 5 基検出した。形状は円を基調とするものの、壁面の崩壊でややいびつなものとなっている。すべて調査区中央に集中し、素掘の 1 から 2 段掘のものである。磁器・瓦器等の外、藁灰状のものや、植物繊維

を程度の差こそあれ一様に検出した。特徴的なものを抽出し後述する。

S E 001 井戸 (Fig. 20)

調査区中央東寄りにあって、この遺跡で検出した井戸の中で最も規模が大きい。掘込み面の標高は 5.4m。この遺跡で検出した井戸の中では最も規模が大きい。長径 2.97m、短径 2.33m、検出深度 1.67m を測る。素掘、2 段掘のものである。

埋土は 3 層に大別でき、上層が黒色土 (藁灰状のものが混在)、中層が淡黒褐色、下層が淡青灰色となる。この土層は概ね、他の井戸にもあてはまるので、以後省略する。遺物は埋土全域から出土した。遺物は磁器碗・瓦器碗・木器・獣骨などがある。

S E 002 井戸 (Fig. 21)

調査区中央にあり、S D 020 を切る。掘込み面の標高は 5.5m。上面の平面形は、ややいびつではあるが円形を基調とするもので径 1.7m、深さは中心部で 1.83m を測る。床面は部分的にしか確認していない。

出土遺物には磁器碗・木器片などがある。また、埋土下層で植物繊維が観察できた。

SE003井戸 (Fig. 22)

調査区中央にあり、井戸群の中では最小のものである。掘込み面の標高は5.45m。SD020を切っている。素掘の1段掘井戸である。上面の平面形は円形を基調とするもので径0.9m内外、深さ0.95mを測る。底面は舟底状を呈し、壁は垂直に近い立ち上がりをめせる。

出土遺物には土師器坏・小皿を検出した。

SE005井戸 (Fig. 23)

調査区北部中央にあり、一

群の中では最北端に位置する掘込み面の標高は5.6m。2段掘の素掘井戸である。上面の平面形は円形を基調とするものであるが、掘込みが一部崩れているので、長径2.05m、短径1.84mの楕円状を呈し、検出深度は2.2m。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

出土遺物には瓦器（小皿・埴）がある。

(3) 溝

A地区で6条、B地区で15条検出した。弥生時代の溝が数的には多いが、その全体の様相は全く把握できなかった。規模は幅0.3mから1.0m、深さ0.1mから0.3m程度、埋土は淡茶褐色を呈し、多くの遺構と切れあっている。遺物は弥生土器片を少量検出した。

奈良時代の溝にはA地区SD002・3がある。SD002がSD003を切り、SD002も土壇状のものと切合い関係がある。溝埋土中から須恵器土錘、滑石製紡錘車などを検出した。

上記以外の時代のものにB地区南部のSD008がある。出土遺物は古代のものと中世のものを検出したが、上面での検出であり流込みによるものと考える。

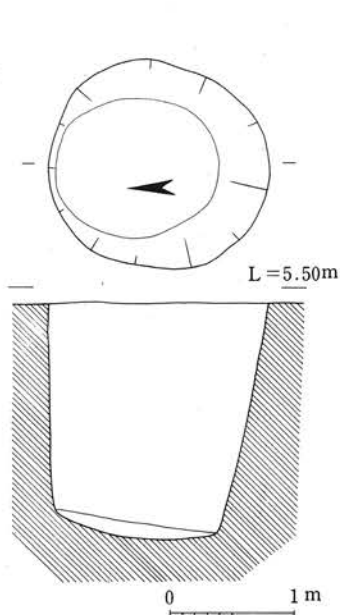


Fig. 22 SE003 井戸実測図
(S = 1/40)

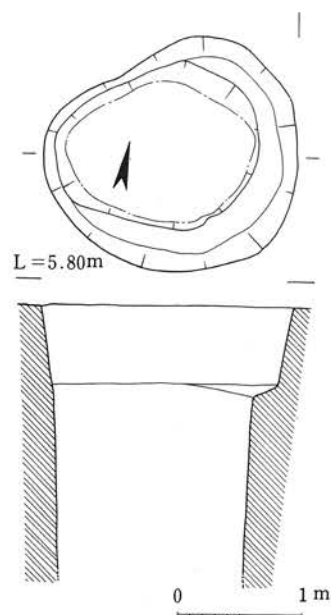


Fig. 23 SE005 井戸実測図
(S = 1/40)

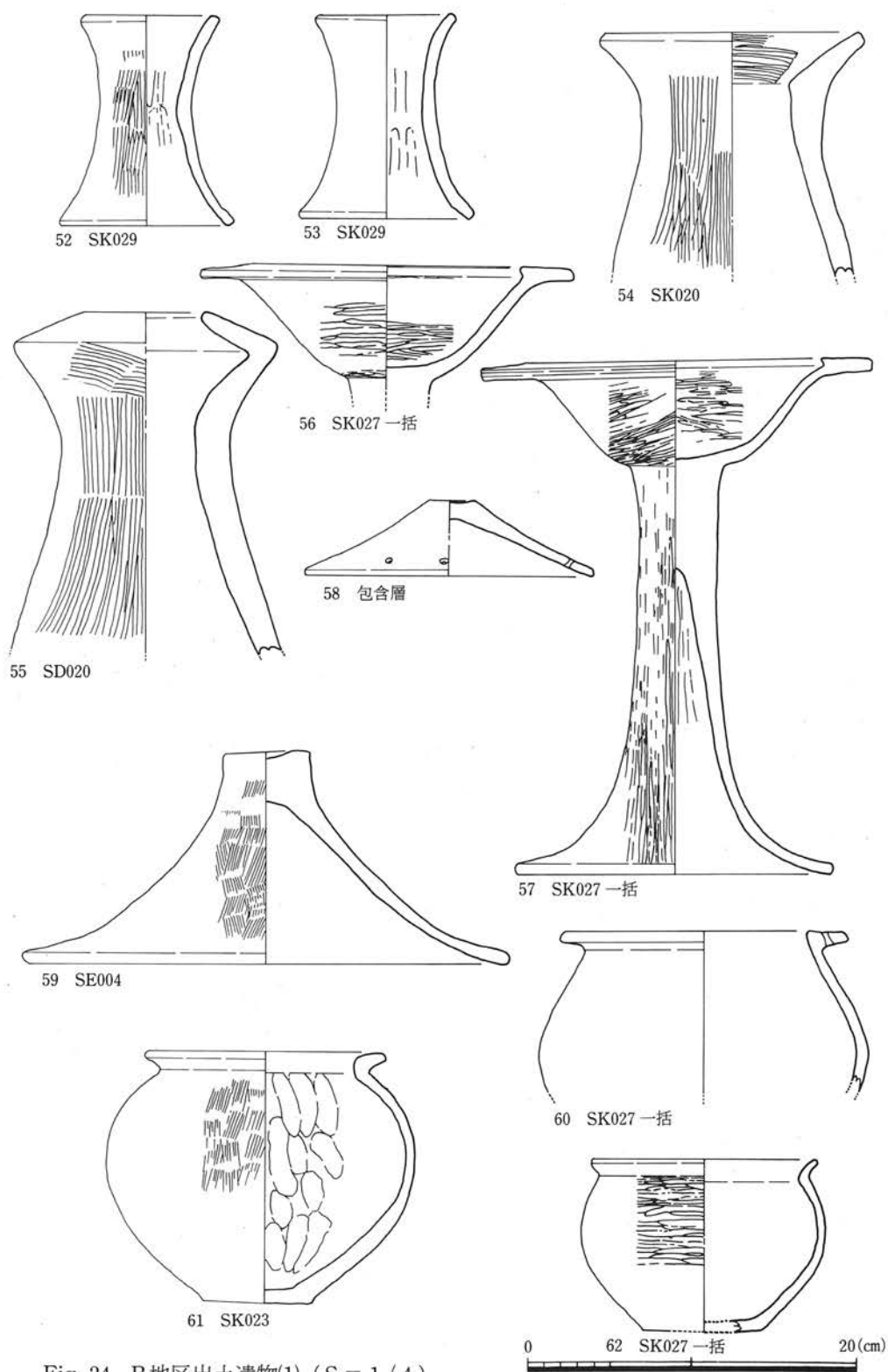


Fig. 24 B地区出土遺物(1) (S = 1/4)

(4) B地区出土遺物

B地区の土壌からは弥生時代・古墳時代の遺物が多数出土した。52から76がその主要なものである。52から55は器台。3種に大別できる。52・53は受部径10.4から10.45cm、脚部径12.1から12.5cm、器高8.25から8.35cmを測る小型のものである。器壁厚は全体的に平均している。調整は主としてハケ目・ナデ・ヨコナデによる。54は受部径15.1cm、残存器高14.3cm。受部は「く」の字状に外反し、内面に稜を有する。調整は受部内面が横方向のハケ目、外面がヨコナデ、脚部内面がナデ、外面が縦方向のハケ目。55は受部が逆「く」の字状にまがるもので受部径20.5cm。調整は受部内外面共にヨコナデとナデ、脚部内面がナデ、外面が上端部横方向のハケ目、それより下部が縦方向のハケ目。56は高坏。口径（内径）16.0cm、残存器高7.65cm。平坦な口縁をもち、内側端部は鋤状を呈する。外面口縁端部にはヘラ状工具による沈線が一周している。調整は主としてヘラミガキ、ヨコナデ。また口縁の平坦部には暗紋がある。

57は高坏。口径（内径）17.6cm、器高30.7cm、脚部径18.9cm。ほぼ完形である。器形は56と同様。調整は脚部内面と口縁部以外、ていねいなヘラミガキがある。58は蓋。底径17cm、器高45cm。天井部から直線的にのび底部に至る。底部付近に焼成前の穿孔があるが、この個体が完形でないため、全体の箇所数は不明。59も蓋。底径29.05cm、器高12.7cm、頭部径5.05cm。頭部はいわゆる甕形土器等の器種でいう上底状を呈し、体部はゆるやかに外反しながら底部に至る。調整は外面が主として縦方向のハケ目、内部がナデとヨコナデによる。60は壺。復元口径12.3cm、残存器高9.65cm。ほぼ平坦な口縁をもち、胴部は丸味をもつ。口縁部上面に焼成前の穿孔を有する。調整は主としてナデとヨコナデ。61は壺、口径14.35cm、器高14.95cm、底径6.55cm。器体は底部からゆるやかに内湾しながら立ち上がり、頸部で外反・短い口縁部をもつ。調整は口縁部内外面共にヨコナデ、体部外面ハケ目、内面、ナデによる。色調は明褐色を基調とし、一部に赤色顔料を塗料してあった痕跡を有する。62は壺。口径13.15cm、器高10.25cm、復元底径7.3cm。61と同様ではあるが、法量、器壁厚、調整等に差異がある。調整は口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面上半ヘラミガキ、下半ナデ、胴部内面ナデによる。63は壺。口径25.6cm、残存器高14.5cm、口縁部と体部の境は明確に観察できる。長い口縁は外反しながら立ち上がり、端部は平坦。調整は主としてナデとヨコナデによる。64は壺の胴部。残存器高23.8cm、頸部に2条と胴部に1条の断面三角形の凸帯を有する。調整は内外面共にナデとハケ目による。65は甕。胴下半部を欠き、残存器高30.75cm、口径（内径）34.3cm。平坦な口縁をもち、口縁下部外面に2条の凸帯を有する。調整は口縁内外面ヨコナデ、胴部外面縦方向の短いハケ目、内面ナデによる。色調は暗褐色。66は鉢。復元口径32.3cm、器高16.8cm、底径9.4cm。わずかに上底気味の底部から、ゆるやかに内湾しながら立ち上がる。口縁下部に断面台形状の凸帯を1条有する。調整は口縁部外面ヨコナデ、内面横方向のハケ目、胴部外面横方向のハケ目ナデ、内面ナデとなっている。色調は茶褐色を基調とし、外面の一部に黒斑あり。67から68は石包丁。幅3.7から4.0cm、厚さ0.35から0.6cm。69は磨製石剣。残存長12.6cm、柄部3.6cm、最大幅2.85cm、最大厚

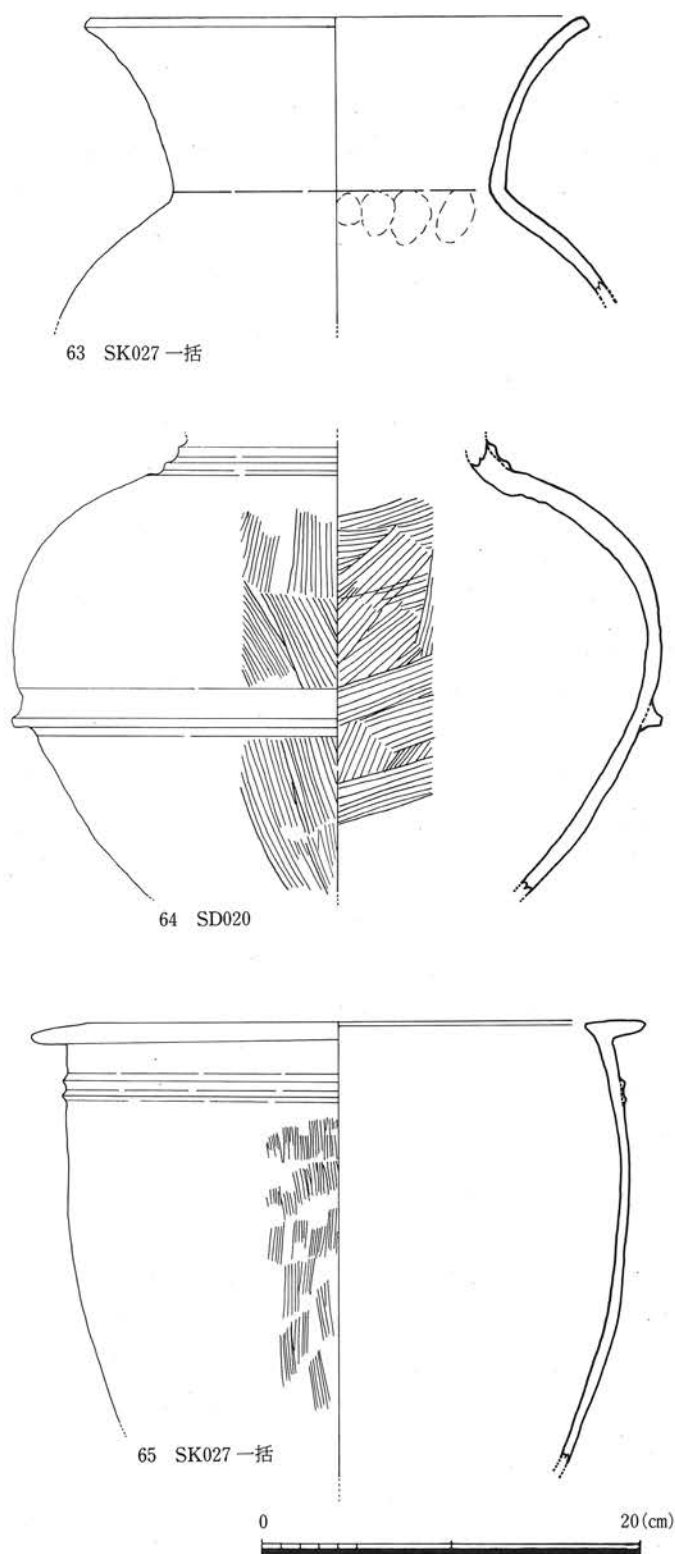


Fig. 25 B地区出土遺物(2) (S = 1 / 4)

0.8cm。細身で材質は緑泥片岩様。先端と刃部をわずかに欠く。70から76は一括資料。70・71は台付碗。口径12.75・15.7cm、器高6.85・7.75cm、底径6.05・6.95cm。体部はゆるく内湾しながら立ち上がり、口唇部は丸みをもつ。胎土は0.3cmから0.4cmの砂粒を多く含み、色調は褐色を基調とする。72は高杯。受部径15.2cm、器高9.2cm、脚径9.6cm。口縁下部には折返しがなく、なだらかに立ち上がる。脚部に焼成前の穿孔が3箇所にある。調整は坏部内面放射状のヘラミガキ、外面ヨコナデ、脚部外面ヘラ状工具によるナデとハケ目、内面ヘラ状工具によるナデとヨコナデ。73は壺。口径10.35cm、器高15.9cm。丸底でほぼ完形品。球状の胴部をもち、口縁部はほぼ直立し端部は先鋭化する。頸部外面に稜を有する。調整は口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面ナデ、内面ヘラケズリ。0.3cm程度の砂粒多含。色調は明茶褐色74は二重口縁の壺。ほぼ完形品。口径18.1cm、残存器高19.9cm（推定20.3cm程度）。そろばん球状の胴部をもち頸部はほぼ直立する。口縁部は頸部上端から2cm程度外側にのび、そ

こから直線的に外傾し、口唇部で外反する。調整は口縁部内外面ヨコナデ、頸部内外面ヨコナデ、胴部外面ナデとヨコナデ、内面ヘラケズリ。胴部外面下半が一部焼成後の剝離により孔があいているが、意図的な穿孔も考えられる。胎土は0.3cmから0.4cm程度の砂粒を少量含み、色調は明茶褐色。

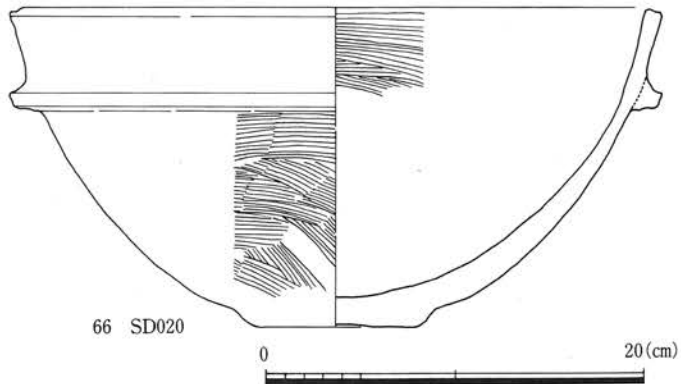
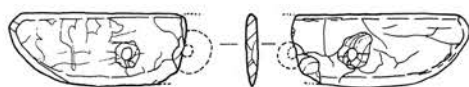


Fig. 26 B地区出土遺物(3) (S = 1 / 4)

75は壺。口径18.35cm、器高

33.95cm。最大径を肩部に有する縦長で丸底の壺。頸部から口縁部にかけてゆるやかに外反する。口縁端部内面はわずかにつまみ上げをしている。調整は口縁部内外面共にヨコナデ、胴部外面ハケ目のあとナデ、内面ヘラケズリによる。胎土は0.2cm程度の砂粒を含み、色調は茶褐色を基調とする。76は壺。口径15.4cm、残存器高12.0cm。球状の胴部から内傾する短い頸部に至り、口縁部はそこから内湾気味に立ち上がる。口唇部はわずかにつまみ上げをしている。胴部内面がヘラケズリで他はヨコナデ、ナデによる。77は土師器小皿。77から80がP-1出土、81から84がS E 003出土であるが形態・法量からみて時期差を与えられる。前者で口径9.15cmから9.75cm、器高1.25cmから1.3cm、底径7.0cmから7.5cm、後者で口径8.1cmから8.8cm、器高1.7cmから2.0cm、底径5.75cmから6.65cm。後者底部外面には糸切痕が残る。85・86は瓦器小皿。口径9.1cmから10.25cm、器高1.55・2.1cm。底部外面に板目痕が残る。87は青磁坏。口径13.0cm、器高3.0cm、底径4.9cm。施釉は基本的には口縁部外面まで。88・89は土師器坏。口径13.3・13.5cm、器高3.35・2.6cm、底径8.9・8.45cm。糸切りによる平坦な底部から、口縁部は直線的にのびるタイプ。90は土師器坏(蓋)。口径10.1cm、器高3.25cm。外面体部にヘラケズリ、口縁部から内面底部にかけてヨコナデ、ナデを施している。91から94は瓦器碗。口径16.4から17.95cm、器高5.55cmから6.75cm、高台径6.65cmから7.55cm。92から94は器面にヘラミガキが施されている。95は黒色土器碗。口径13.9cm、残存器高5.1cm。高台部が一部残る。口縁部は直立気味に立ち上がる。色調は内面黒色、外面茶褐色及び灰褐色を呈す。96は磁器碗。内外面に櫛目による文様をもち、釉は灰緑色を基調とする。復元口径16.6cm、残存器高4.95cm。97から99は磁器碗。97で口径16.5、器高6.4cm、高台径6.4cm。外面には連弁が削り出されている。畳付部から底部内面は露胎。釉は灰緑色。98で復元口径15.35cm、器高5.9cm、高台径5.2cm。外面には鐏を有する連弁が削り出されている。釉は内面から高台外面におよぶが高台部の施釉はやや雑。釉の色調は緑灰色を基調とする。99で復元口径16.25cm、器高6.7cm、高台径6.5cm。全体的に厚い器壁



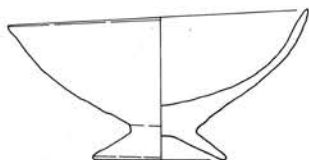
67 調査区北東部土器溜



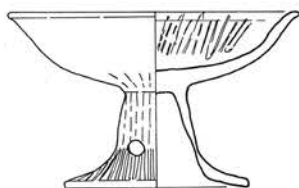
68 調査区北東部土器溜



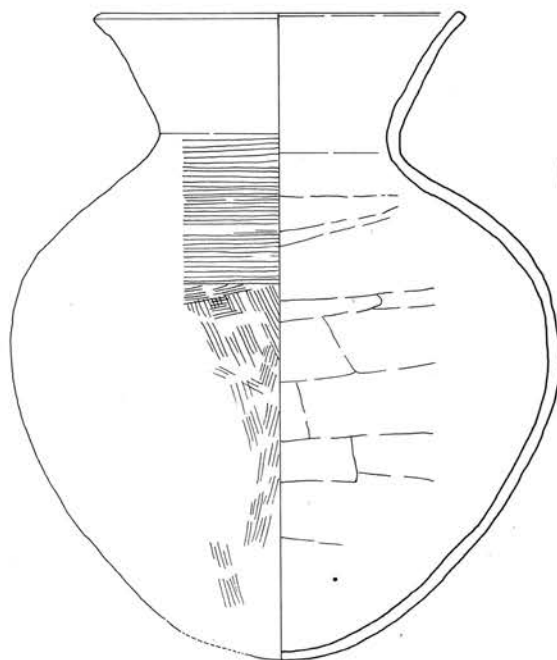
70 S K023底面



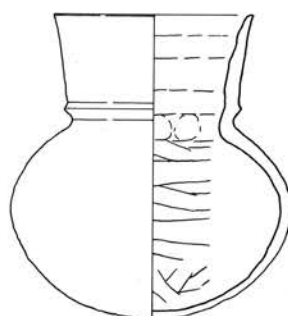
71 SK032 底面



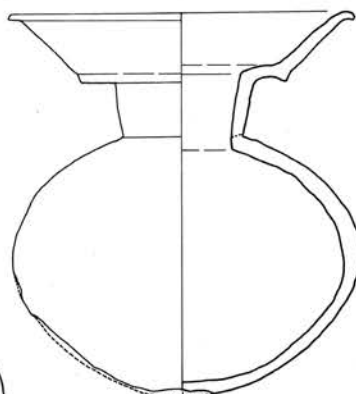
72 SK032 底面



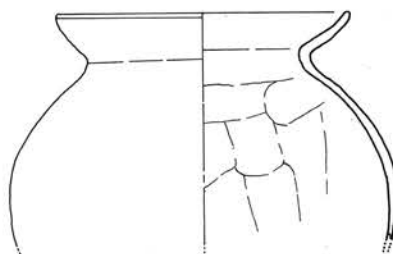
75 SK032 底面



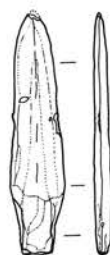
73 SK032



74 SK032



76 SK032 底面



70 SK021 上層



Fig. 27 B地区出土遺物(4) (S = 1 / 4)

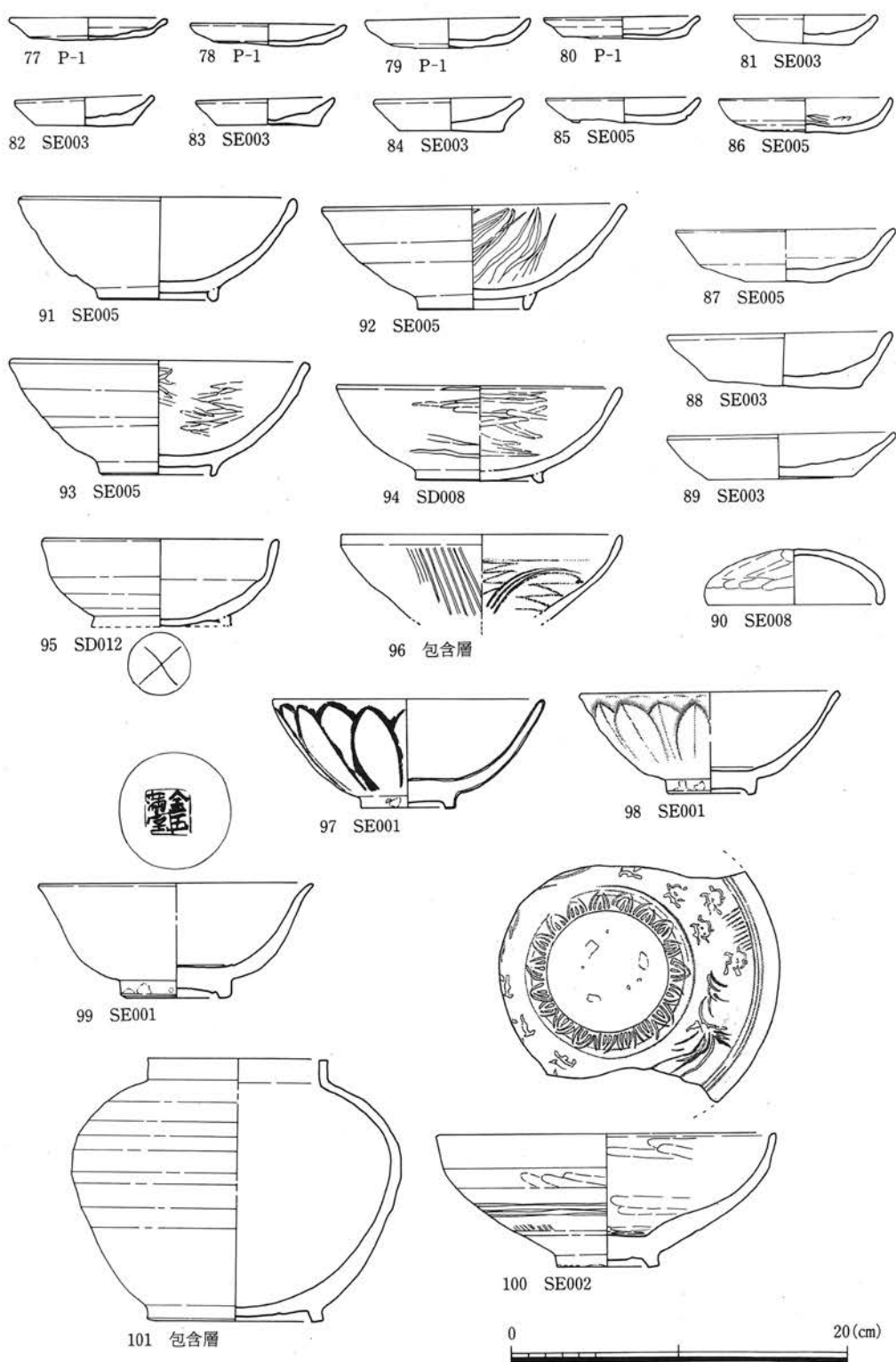


Fig. 28 B地区出土遺物(5) (S = 1 / 4)

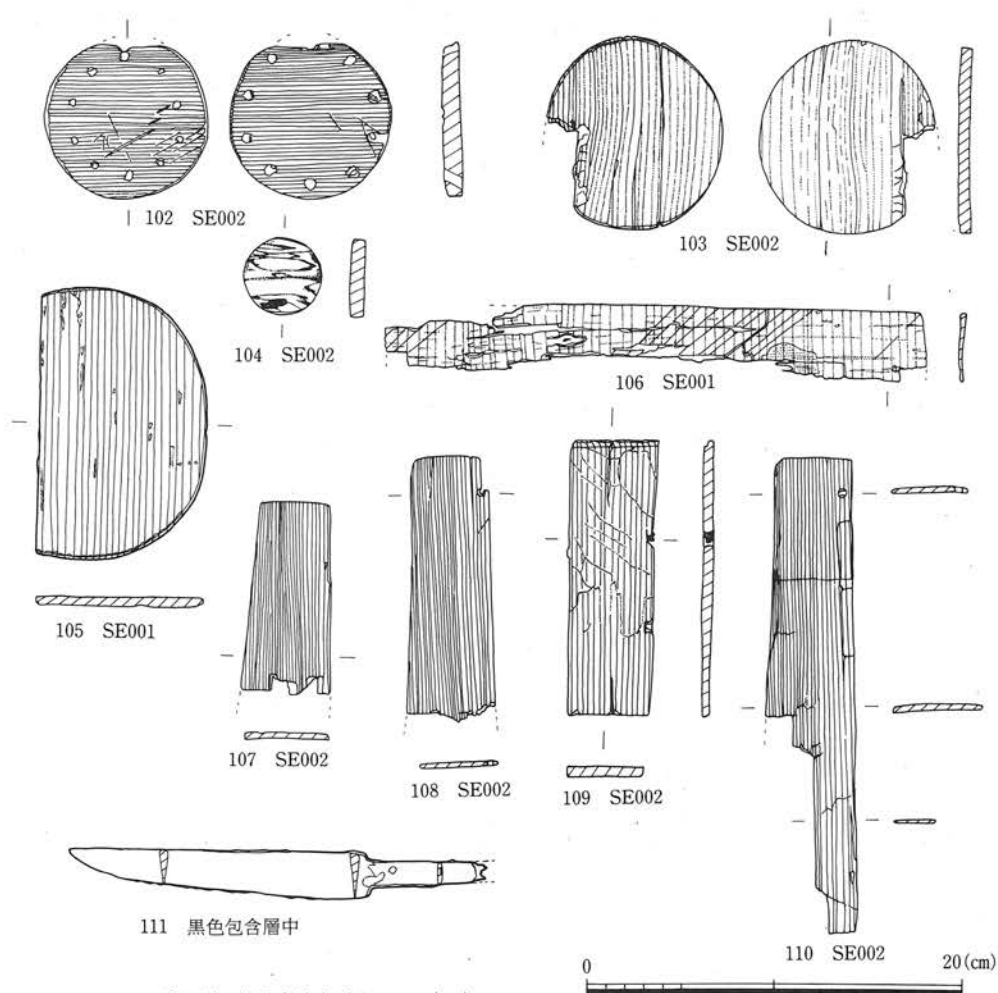


Fig. 29 B地区出土遺物(6) (S = 1 / 4)

をもつ。内面見込みに吉祥句である金玉満堂のスタンプがある。100は磁器碗。高麗系と考える。復元口径19.7cm、器高7.65cm、高台径5.9cm。内面にはヘラとスタンプにより草紋、花紋、連弧紋を描いている。紋様色調は白灰色、黒色の2種類。施釉は全面、色調は緑灰色。畳付部に砂が付着する。101は須恵器短頸壺。復元口径10.6cm、器高15.35cm、復元高台径10.35。最大径を胴部にもち、口縁部は短く、直立する。調整はロクロ回転によるナデを主体とするが、胴部外面の一部にロクロ回転によるヘラケズリも見られる。色調は淡灰黒色を基調とする。

3. まとめ

佐賀工場団地内遺跡は今回の発掘調査により、弥生時代・古墳時代・中世に営まれた集落であることがわかった。集落といっても住居跡を多数検出したものではなく、井戸・土壇・溝な

ど、その一部分と考えられるものを検出した。集落というよりも『生活跡』という名称を与えた方が適しているように思えるものである。

弥生時代の遺構は中期・後期にかけての所産である土壙・溝・土器溜りを検出した。出土遺物には甕・鉢・高坏・壺・器台・石包丁などがある。B地区北部に集中する。土壙は規模・形状が多様で規格性がない。その法量は長軸で1mから1.5m前後のものが多い。切合い関係や掘込みが不明確なものも多く、その性格は決定し難い。

古墳時代の遺構は、弥生・中世のそれと比較して量的には少ない。遺跡堆積土中からは土師器細片を確認していたので、ある程度の遺構検出数を予測していたが、明確なものはB地区SK032・SD008のみである。SK032はこの遺跡の土壙の中で最も大きく、床面直上で土師器の一括遺物を検出した。(Fig. 19)時期的には5世紀前半の所産と考えるが、いわゆる古墳以外でこれらがセットとして検出した例は佐賀市域では初めてのことである。墳墓でも住居跡でもない遺構から、床面に配置(埋置)された状況で検出したことで遺構の性格を祭祀と位置づけるのは早急であろうか。

中世の遺構として明確なものにはB地区検出の井戸がある。この遺跡からは5か所で検出した。この時期のものは佐賀市域では昭和56年以来、調査例が少しずつ増加しているが、全体を概観するといくつかの共通点がある。調査地の位置(地形)に拘わらず、埋土上層が黒色(藁灰状物質混入)である。土師器・瓦器・磁器・木片(木器)・草本類の植物繊維が確認できるなどであるが、市域で検出した18基の井戸は、概ねその共通要素を具備している。この数量から見て、前述の要素が普遍的なものとはし難いが、今後の調査のため提示しておきたい。

今回の井戸の調査で検出した遺物の中で特筆すべきものとしてSE001出土(Fig. 29)の磁器碗がある。この種のものは佐賀市域でははじめてであり、土師器・瓦器や龍泉窯系の磁器に混じって出土した。高麗磁器系のもので14世紀前半の所産と考える。

佐賀工場団地内遺跡全域の広がり^{註1}は約50,000m²におよぶ。この遺跡の広がりを、その立地条件から整理してみたい。標高6mを測り、多布施川中流域東岸に位置する。この川の本流は多布施の鉄橋の下流で天祐寺川を分流し、市街地に入り、護国神社前を経て二派に分れ、本流は途中松原川を分ち、城内を環流し、八田江、佐賀江に注いでいる。このような低地の中でもわずかな高まりがあり、そこで生活を営んでいたものと推定する。多布施川下流域の古代遺跡としては成章中学校庭遺跡^{註2}、好生館遺跡^{註3}がある。これらもこの遺跡同様の立地条件ではなかったろうか。

註1. 佐賀県遺跡地図中にある、佐賀工場団地内遺跡の範囲から概算した。

註2. 『佐賀市史』第1巻。

註3. 『佐賀県遺跡地図』

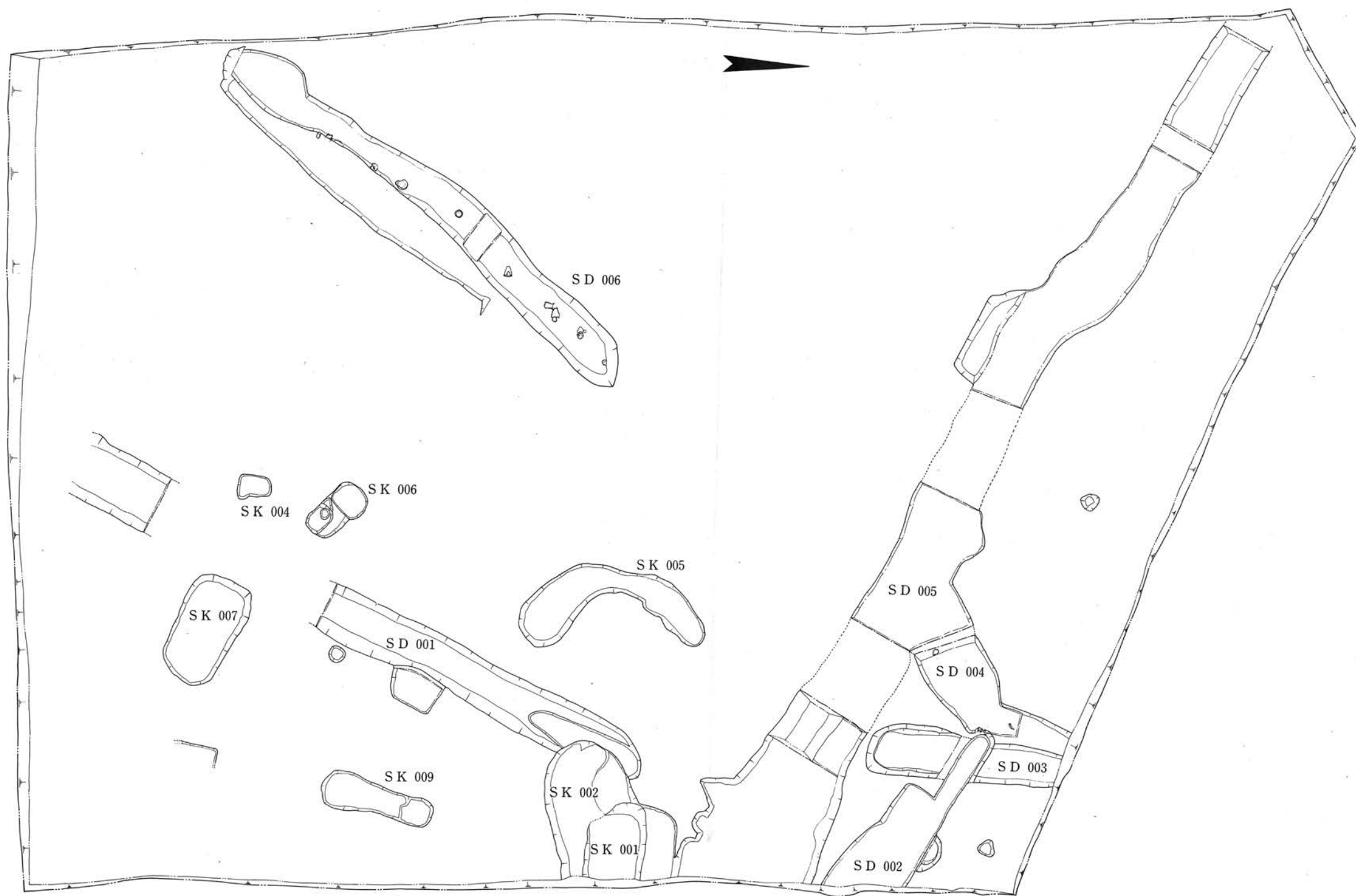


Fig. 30 佐賀工場団地内遺跡A地区遺構配置図 (S = 1/60)

0 4 m

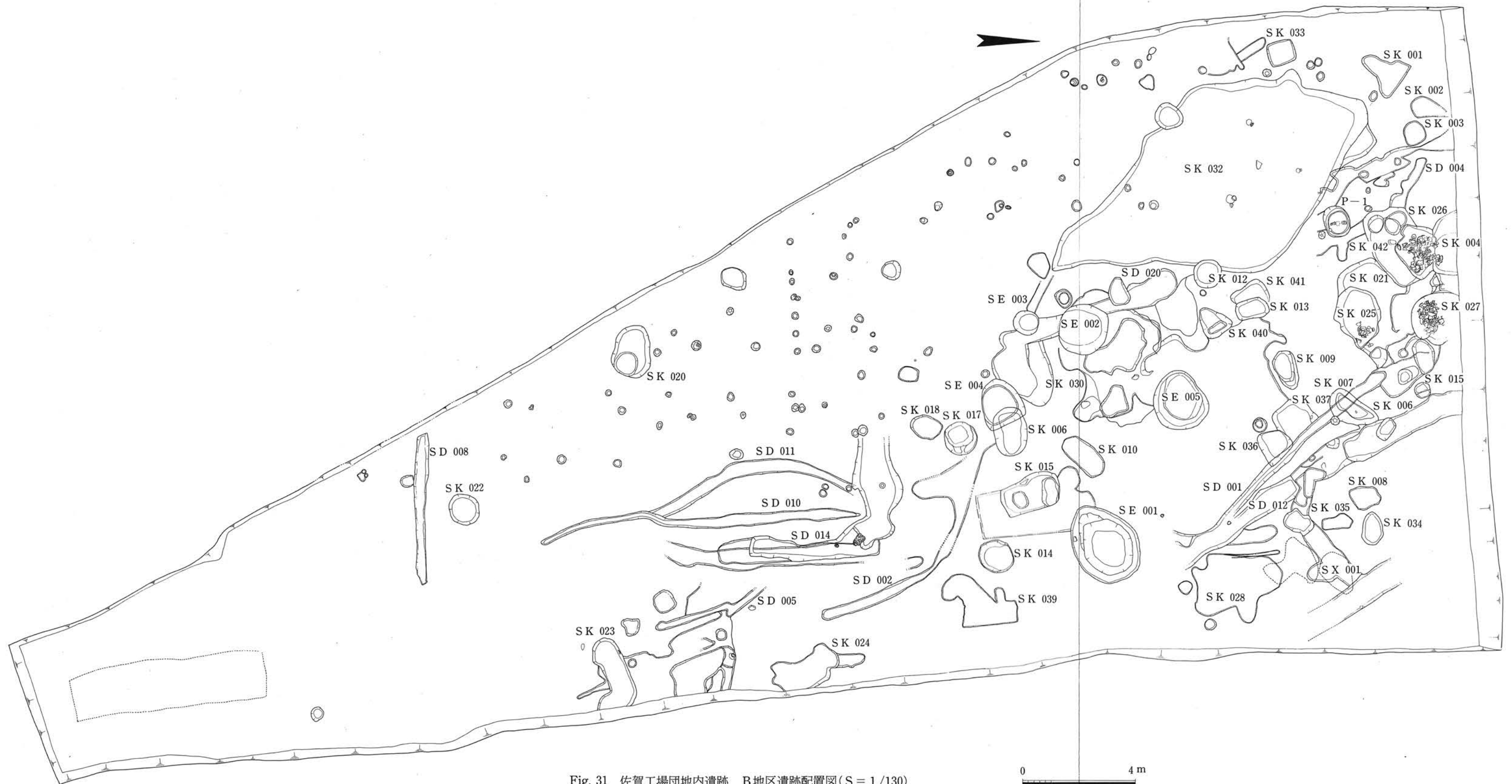


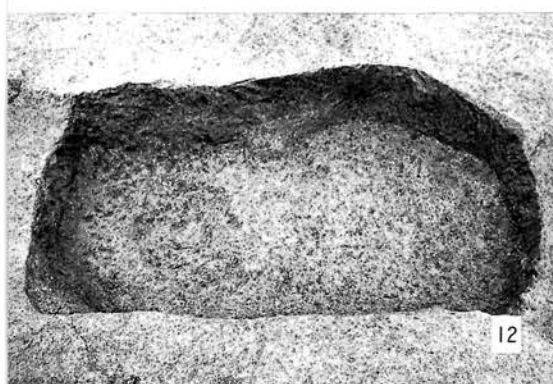
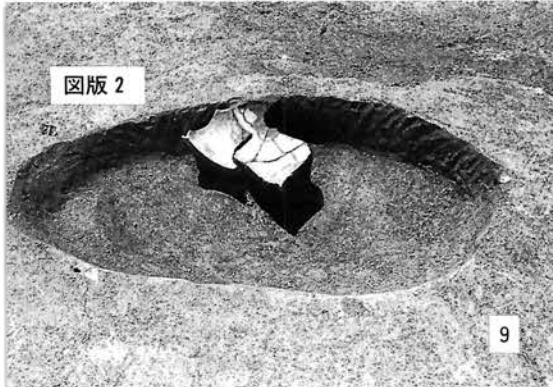
Fig. 31 佐賀工場団地内遺跡 B地区遺跡配置図(S = 1/130)

版 図



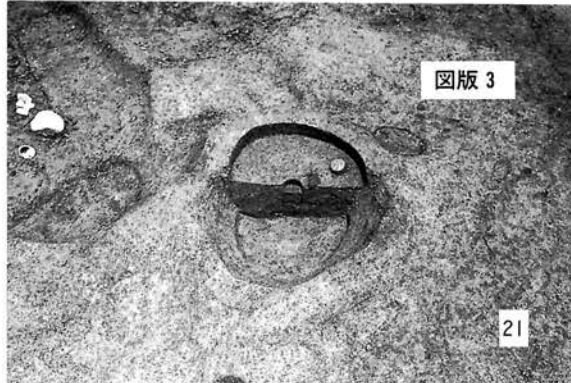
〔A地区〕

- | | |
|---------------|-------------|
| 1. S K001土墳 | 5. S K006土墳 |
| 2. S K001・2土墳 | 6. S D001溝 |
| 3. S K005土墳 | 7. S D006溝 |
| 4. S K008土墳 | 8. A地区全景 |



〔B地区〕

- | | |
|--------------|------------------|
| 9. S K009土壇 | 13. S K026・027土壇 |
| 10. S K010土壇 | 14. S K026土壇 |
| 11. S K014土壇 | 15. S K027土壇 |
| 12. S K015土壇 | 16. S X001土器溜り |



〔B地区〕

17. 石包丁出土状況

18. S K032土壇

19. S K032土壇出土土師器

20. 同上

21. P-1

22. 井戸群検出状況

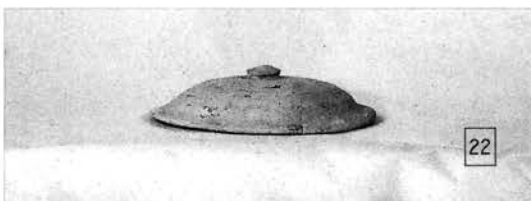
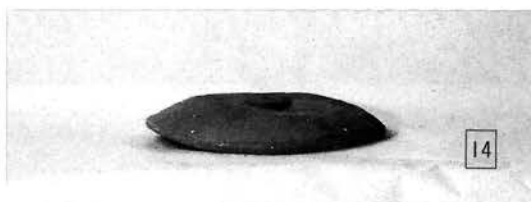
23. S E001井戸

24. S E002井戸



〔B地区〕

25. B地区中央東壁部 27. B地区北半部
26. B地区東北部 28. B地区全景



12. 14. S K005出土
15. 16. 17. S K007出土
21~30. S D003出土



31



32



34



35



36



40



44

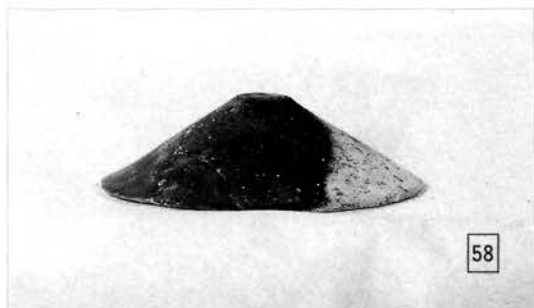
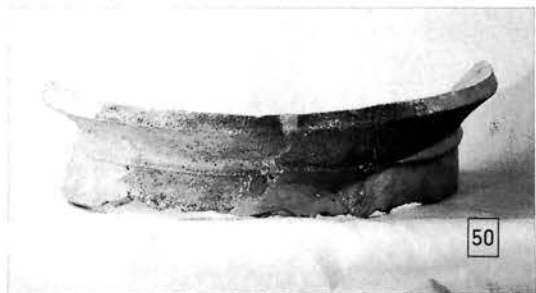


45



46

31. S D003出土
32~36 S D004出土
40, 44~46. S D006出土



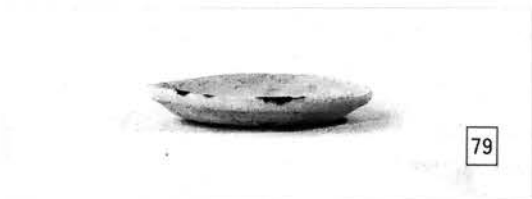
47. 50. S D006出土
52. 53. S K029出土
54. 55. S K020出土

57. S K027出土
58. 包含層出土
59. S E004出土



60. 62. S K027出土
61. S K023出土
63. S K027出土
66. S D020出土

67. 調査区北東部土器溜出土
69. S K021上層出土
70～73. S K032出土



74~76. S K032出土
P-1 出土
85. 86. S E003出土
87. S E005出土

88. 89. S E003出土
91. 92. S E005出土



93



95



97



98



99



100



100



101



105

93. S E 005出土

95. S D 012出土

97. 98. 99. 100. S E 001出土

101. 包含層出土

104. S E 001出土

佐賀市文化財調査報告書第23集

佐賀工場団地内遺跡

平成元年 3 月31日

発行 佐賀市教育委員会
佐賀市栄町1番1号

印刷 (株) 宮地印刷
佐賀市長瀬町11-20